

ひのきとひなげし

宮沢賢治

青空文庫

ひなげしはみんなまつ赤に燃えあがり、めいめい風にぐらぐらゆれて、息もつけないようでした。そのひなげしのうしろの方で、やっぱり風に髪もからだも、いちめんもまれて立ちながら若いひのきが云いました。

「おまえたちはみんなまつ赤な帆船ほふねでね、いまがあらしのところなんだ」

「いやあだ、あたしら、そんな帆船やなんかじゃないわ。せだけ高くてばかあなひのき。ひなげしどもは、みんないっしょに云いました。」

「そして向うに居るのはな、もうみがきたて燃えたての銅あかがねづくりのいきものなんだ。」

「いやあだ、お日さま、そんなあかがねなんかじゃないわ。せだけ高くてばかあなひのき。ひなげしどもはみんないっしょに叫さけびます。」

ところがこのときお日さまは、さっさっさつと大きな呼吸を四五へんついてるり色をした山に入ってしまった。

風が一そうはげしくなつてひのきもまるで青黒馬あおうまのしっぽのよう、ひなげしどもはみな熱病にかかったよう、てんでに何かうわごとを、南の風に云ったのですが風はてんから相手にせずどしどし向うへかけぬけます。

ひなげしどもはそこですこうししずまりました。東には大きな立派な雲の峰が少し青ざめて四つならんで立ちました。

いちばん小さいひなげしが、ひとりでこそ云いました。

「ああつまらないつまらない、もう一生合唱手だわ。いちど女王にしてくれたら、あしたは死んでもいいんだけど。」

となりの黒斑のはいった花がすぐ引きとつて云いました。

「それはもちろんあたしもそうよ。だってスターにならなくなつてどうせあしたは死ぬんだわ。」

「あら、いくらスターでなくつてもあなたの位立派ならもうそれだけで沢山だわ。」

「うそうそ。とてもつまんない。そりやあたしくらかあなたよりあたしの方がいいわねえ。わたしもやつぱりそう思つてよ。けどテクラさんどうでしょう。まるで及びもつかないわ。青いチョッキの虻さんでも黄のんだんだらの蜂めまでみなまっさきにあっちへ行くわ。」

向うの葵の花壇から悪魔が小さな蛙にばけて、ベートルベンの着たような青いフロックコートを羽織りそれに新月よりもけだかいばら娘に仕立てた自分の弟子の手を引いて、大

変あわてた風をしてやって来たのです。

「や、道をまちがえたかな。それとも地図が違つてゐるか。失敗。失敗。はて、一寸聞いてみよう。もしもし、美容術のうちはどっちでしたかね。」

ひなげしはあんまり立派なばらの娘を見、又美容術と聞いたので、みんなドキツとしましたが、誰もはずかしがつて返事をしませんでした。悪魔の蛙がばらの娘に云いました。「ははあ、この辺のひなげしどもはみんなつんぽか何かだな。それに全然無学だな。」

娘にばけた悪魔の弟子はお口をちよつと三角にしていかにもすなおにうなずきました。
女王のテクラが、もう非常な勇氣で云いました。

「何かご用でいらつしやいますか。」

「あ、これは。ええ、一寸おたずねいたしますが、美容院はどちらでしょうか。」

「さあ、あいにくとそういうところ存じませんでございます。一体それがこの近所にでもございましょうか。」

「それはもちろん。現に私のこのむすめなど、前は尖つたおかしなもんでずいぶん心配しましたがかれこれ三度助手のお方に來ていただいてすっかり術をほどこしましてとにかく今はあなた方ともご交際なぞ願えばねがえるようなわけ、あす紐育に連れてでますの

でちよつとお礼に出ましたので。では。」

「あ、一寸。一寸お待ち下さいませ。その美容術の先生はどこへでも出張なさいますかしら。」

「しましような」

「それでは誠に^{まこと}なんですがお序^{ついで}での節、こちらへもお廻^{まわ}りねがえませんか。」

「そう。しかし私はその先生の書生というでもありません。けれども、しかしとにかくそう云いましょう。おい。行こう。さよなら。」

悪魔は娘の手をひいて、向うのどてのかげまで行くと片眼^{かため}をつぶって云いました。

「お前はこれで帰ってよし。そしてキャベジと鮎^{ふな}とをな灰で煮込^{にこ}んでおいてくれ。ではおれは今度は医者だから。」といいながらすつかり小さな白い鬚^{ひげ}の医者にばけました。悪魔の弟子はさつそく大きな雀^{すずめ}の形になってぼろんと飛んで行きました。

東の雲のみねはだんだん高く、だんだん白くなって、いまは空の頂上まで届くほどです。悪魔は急いでひなげしの所へやって参りました。

「ええと、この辺じやと云われたが、どうも門へ標^{ひょうさつ}札も出してないというようなあんばいだ。一寸たずねますが、ひなげしさんたちのおすまいはどの辺ですか。」

賢い^{かしこ}テクラがドキドキしながら云いました。

「あの、ひなげしは手前でもございます。どなたでいらつしやいますか。」

「そう、わしは先刻^{はくしやく}伯^{はくしやく}爵^{はくしやく}からご言伝^{ことづて}になった医者ですがね。」

「それは失礼いたしました。椅子^{いす}もございせんがまあどうぞこちらへ。そして私共は立派になれましょうか。」

「なりますね。まあ三服でちよつとさつきのむすめぐらいというところ。しかし薬は高いから。」

ひなげしはみんな顔色を変えてためいきをつきました。テクラがたずねました。

「一体どれ位でございましょう。」

「左様。お一人が五ビルです。」

ひなげしはしいんとしてしまいました。お医者 of 悪魔もあごのひげをひねったまましいんとして空をみあげています。雲のみねはだんだん崩^{くず}れてしずかな金いろにかがやき、そおつと、北の方へ流れ出しました。

ひなげしはやつぱりしいんとしています。お医者もじつとやつぱりおひげをにぎったきり、花壇の遠くの方などはもうぼんやりと藍^{あゐ}いろです。そのとき風が来ましたのでひなげ

しどもはちよつとざわつとなりました。

お医者もちらつと眼めをうごかしたようでしたがまもなくやっぱり前のようしいんと静まり返っています。

その時一番小さいひなげしが、思い切ったように云いました。

「お医者さん。わたくしおあしなんか一文もないのよ。けども少したてばあたしの頭にあ片へんができるのよ。それをみんなあげることにしてはいけなくって。」

「ほう。亜片かね。あんまり間には合わないけれどもにかくその薬はわしの方では要いんでね。よし。いかにも承知した。証文を書きなさい。」

するとみんながまるで一ぺんに叫びました。

「私もどうかそうお願いいたします。どうか私もそうお願い致いたします。」

お医者はまだで困ったというように額しわに皺しわをよせて考えていましたが、

「仕方ない。よかろう。何もかもみな慈善じぜんのためじゃ。承知した。証文を書きなさい。」

さあ大変だあたし字なんか書けないわとひなげしどもがみんな一いっしょ諸に思ったとき悪魔のお医者様はもう持って来た鞆かばんから印刷にした証書を沢山出しました。そして笑って云いました。

「ではそのわしがこの紙をひとつぱらぱらめくるからみんないっしょにこう云いなさい。

亜片はみんな差しあげ候と、そうろう」

まあよかつたとひなげしどもはみんないちどにぎわつきました。お医者^おは立つて云いました。

「では」ぱらぱらぱらぱら、

「亜片はみんな差しあげ候。」

「よろしい。早速薬をあげる。一服、二服、三服とな。まずわたしがここで第一服の呪じゆも文^{ぶん}をうたう。するとここらの空気にな。きらきら赤い波がたつ。それをみんなで呑^のむんだな。」

悪魔のお医者^おはとてもふしぎない声でおかしな歌をやりました。

「まひるの草木と石土を 照らさんことを怠^{おこた}りし 赤きひかりは集^{つど}い来てなすすべしらに漂^{ただよ}えよ。」

するとほんとうにそこらのもう浅黄^{あさぎ}いろになった空気^{空気}のなかに見えるか見えないうような赤い光^{赤い光}がかすかな波^波になってゆれました。ひなげしどもはじぶんこそいちばん美しくなろうと一生けん命^{一生けん命}その風^風を吸^ひいました。

悪魔のお医者 はきつと立ってこれを見渡みわたしていましたがその光が消えてしまうとまた云いました。

「では第二服 まひるの草木と石土を 照らさんことを怠りし 黄なるひかりは集い来てなすすべしらに漂えよ」

空気へうすい蜜みつのような色がちらちら波になりました。ひなげしはまた一生けん命です。「では第三服」とお医者 が云おうとしたときでした。

「おおい、お医者や、あんまり変な声を出してくれるなよ。ここは、セントジョバンニ様のお庭だからな。」ひのきが高く叫びました。

その時風がザアツとやって来ました。ひのきが高く叫びました。

「こうらにせ医者。まてつ。」

すると医者 是たいへんあわてて、まるでのろしのように急に立ちあがって、滅法界めっぼうかいもなく大きく黒くなって、途方とほうもない方へ飛んで行ってしまいました。その足さきはまるで釘くぎ抜きぬのように尖り黒い診察靴しんさつかばんもけむりのように消えたのです。

ひなげしはみんなあつけにとられてぽかっとそらをながめています。

ひのきがそこで云いました。

「もう一足でおまえたちみんな頭をばりばり食われるとこだった。」

「それだつていいじゃあないの。おせつかいのひのき」

もうまつ黒に見えるひなげしどもはみんな怒おこつて云いました。

「そうじゃあないて。おまえたちが青いけし坊主ぼうずのまんまでがりがり食われてしまったら

もう来年はここへは草が生えるだけ、それに第一スターになりたいなんておまえたち、スターて何だか知りもしない癖くせに。スターというのはな、本当は天てん井じょうのお屋さまのこと

なんだ。そらあすこへもうお出になつてゐる。もすこしたてばそらいちめんにおでましだ。

そうそうオールスターキャストというだろう。オールスターキャストというのがつまりそ

れだ。つまり双子星座ふたご様は双子星座様のところにレオーノ様はレオーノ様のところに、ち

やんと定さだまつた場所さだでめいめいのきまつた光りようをなさるのがオールスターキャスト、

な、ところがありがたいもんでスターになりたいなりたいたと云つてゐるおまえたちがその

ままそつくりスターでな、おまけにオールスターキャストだということになつてある。そ

れはこうだ。聴きけよ。

あめなる花をほしと云い

この世の星を花という。」

「何を云つてるの。ばかひのき、けし坊主なんかになってあたしら生きていたくないわ。おまけにいまのおかしな声。悪魔のお方のとても足もとにもよりつけないわ。わあい、わあい、おせっかいの、おせっかいの、せい高ひのき」

けしはやっぱり怒っています。

けれども、もうその顔もみんなまっ黒に見えるのでした。それは雲の峯がみんな崩れて牛みたいな形になり、そらのあちこちに星がびかびかしたのです。

ひなげしは、みな、しいんとして居おりました。

ひのきは、まただまって、夕がたのそらを仰ぎました。

西のそらは今はかがやきを納め、東の雲の峯はだんだん崩れて、そこからもう銀いろの一つ星もまたたき出しました。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひのきとひなげし

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>